

- (25) この時期の動向については、前川理子「二一世紀をむかえる日本社会と宗教」『現代宗教二〇〇一』二三五—二三八頁、同「現代宗教の政治と文化」『現代宗教二〇〇二』三二—三二九頁、にまとめられている。
- (26) 前掲「ドキュメント・靖国神社と千鳥ヶ淵」三五—三七頁。
- (27) 中野毅『宗教の復権』東京堂出版、二〇〇二年、一四—一七頁。その区分を、超越的「見えざる国教」と原理主義的「見えざる国教」と整理することもできる。前掲「宗教国家」アメリカは原理主義を克服できるのか」一〇八—一二二頁。



特集 宗教復興の潮流

宗教復興と世俗的近代

現代インドのヒンドゥー・ナショナリズムの事例から

こんどう みつひろ

近藤光博

いま日本では「宗教復興」なる言葉が、現代史を理解し記述するための重要な概念として広く通用している。宗教研究の専門・非専門を問わず、アカデミズムの内外を問わず、現代世界の見取り図を思い描く際、多くの日本人が「復興する諸宗教」という観念に特別の重要性を認めるようになってきているのだ。⁽¹⁾

しかしあらためて問うてみよう——われわれ（本誌の執筆者と読者、もうすでに宗教に大きな関心をもつ専門家と非専門家）の「宗教復興」論はどれほど明晰で豊かなのか。むしろそれは、理解枠組みの混乱と単純化／画一化の不毛に陥っているのではないか。宗教ブーム、新霊性運動／文化、（新）新宗教、カルト、スピリチュアリティ、

原理主義、宗教ナショナリズム、民族紛争、宗教紛争、宗教テロなど、「宗教復興」についての語りは様々な概念を縦横に駆使している。宗教と政治、宗教と民族、宗教とナショナリズム、宗教と暴力、宗教とポストモダン（反近代／脱近代／超近代）、宗教とグローバル化など、問題設定もいろいろだ。しかしそうした多様な問題群は、互いにおぼろげな関係を取りむすぶだけで、全体としては混乱とも呼ぶべき事態をまねいてはいないか。あるいは、「文明の衝突」論よろしく、「宗教復興」論もまた、宗教の差異という観念にもとづいて明瞭に色分けされた各部分からなる大雑把な世界地図を描くことにおさまりがちではないか。豊かな差異と複雑な文化的交渉過程へ

の関心よりも、平板な地球史の理解がおしなされては
いないか。したがって今こそ、多様で複雑でありながら
一貫性をもった「宗教復興」論の枠組みを提示しなす
ときではないか。

こうした問題意識をかかげつつ本稿は、現代インドの
ヒンドゥー・ナショナリズムの事例を足がかりとして、
現代の「宗教復興」についての語り、とりわけ「宗教ナ
ショナリズム」「原理主義」という二つの概念を用いた
語りを、解体し構築しなおすことをめざす。こうして
「宗教復興」論の理論的な再検討をおこなうことで、こ
の分野の重要性と発展可能性を明らかにしたいと思う。

1 宗教ナショナリズムと原理主義

一九九八年三月から二〇〇四年五月、インド連邦の最
高権力はインド人民党 *Bharatiya Janata Party* (略称
BJP) の手中にあった。インド連邦下院(日本の衆議
院に相当)の第一党として政権連合の中核を担った、二
〇〇五年七月現在は最大野党のこの政党は、ヒンドゥ
ー・ナショナリズム(以下HN)と呼ばれる運動/潮流

にもとづいて全てを投げ打ってこの運動に加わる人もい
れば、漠然とした雰囲気になされるようにして関わりを
もつだけの人もいる。こうして、現代インドのHNは、
不明瞭な輪郭線をもつ多中心もしくは無中心の運動体/
潮流として観察されるのである。

しかし、そのような巨大さと多様さにもかかわらず、
圧倒的な組織力とイデオロギー上の影響力の大きさをも
って、目下この運動における最大のプラットフォームとな
っている団体ははっきりと特定できる。それは民族奉
仕団 *Rashtriya Swayamsevak Sangh* (略称RSS) で
ある。草の根の「人格陶冶」「国民教育」を旨とするこ
の任意団体がいかに大きな影響力を有するかは、端的に
は、インド人民党がもとは民族奉仕団の強い意向の
もとに設立され、現在でもきわめて強い程度でそのコン
トロール下にあるという事実から明らかである。こうし
てHNはインドにおいて今まさに絶大な権力を手中に収
めるとともに、巨大な社会勢力としても台頭し存在して
いるのだ。

の議会制民主主義における代表である。この勢力につい
ては、ムスリムやクリスチャンと鋭い対立関係にあるこ
と、核実験も辞さない対決主義的で大国主義的なナショ
ナリズムを掲げることなどが日本でも知られている。

HNはきわめて巨大で多様な運動ないしは潮流である。
その歴史的系譜は遅くとも一九世紀末にまでさかのぼるこ
とができる。植民地支配のもとで進展した「近代化」の
過程、一九世紀末から二〇世紀前半の反英運動期、独立
後六〇年の歴史、とくに九〇年代以降の経済自由化の時
代——こうした単純な時代区分を考えてみただけでも、
いかに多様な傾向がHNに含まれているか推察されよう。
また、この運動/潮流は、あの広大なインド亜大陸の全
土を文字どおり覆うようにして展開しているばかりか、
海外のインド系移民のあいだにも一定の基盤をもつにい
たっている。インド内外のそうした場所では、大小無数
のグループ(明確な規約や構造をもった組織から、インフ
ォーマルで自然発生的な集団まで)が互いに乗り入れたり
離合集散したりしながら運動を展開している。個々の支
持者の動機と信条も多様多彩である。明示的な思想理解

本稿がヒンドゥー・ナショナリズム(HN)と呼ぶ運
動/潮流はときに「ヒンドゥー原理主義」と呼ばれるこ
とがある。私自身、研究を開始した当初、それを適当な
呼称だとみなしていた。しかし、現地の実情を細かに知
るや、そうした憶測は誤りであって、むしろふさわしい
呼称は「ヒンドゥー・ナショナリズム」であること、そ
して、それを特徴づけるのは、原理主義から分立された
分析概念としての宗教ナショナリズムであることに思い
至った。

HN第一の特徴は、想定され働きかけられる人間集団
が「ヒンドゥー」ないしは「ヒンドゥー・ネイション
Hindu nation; Hindu rashtva」と呼ばれることである。
この集団の一体性を保証するのは、古の昔からインド亜
大陸住民によって連綿と受け継がれてきた(とされる)
「ヒンドゥー文化/文明 *Hindu sanskriti*」「ヒンドゥー
の生き方 *Hindu way of life; Hindu jivan paddhati*」な
いしは「印度文化/文明 *Bharatiya sanskriti*」であるこ
う。そしてこうした文化/文明の根本には「ダルマ
Dharma」ないしは「ヒンドゥー教 *Hindu religion*」が

* * *